

小学校における母語支援員の役割 —外国人児童等が多数在籍する小学校の事例から—

塚田智恵 (京都外国語大学)

1. 本研究の目的

本研究の目的は小学校で母語支援員が行った言語的支援をコミュニティ通訳の視座から分析し、母語支援員に求められる能力を明らかにすることである。母語支援員の役割と意義に関する研究には古川(2019)の研究があるが、母語支援員の行っている言語的支援全般を、ある一定期間の記録をもとに明らかにした研究は少ない。

本研究では、滋賀県のX小学校で行われた母語支援員による言語的支援を、日本語指導担当教員と母語支援員の連絡ノート・勤務記録をもとに調査しコミュニティ通訳の視座から分析した。そしてその結果から母語支援員に求められる能力について考察した。

水野(2008)は学校通訳の役割として以下4つを挙げる。(水野,2008:124-126)

- 1)学習指導
 - 2)カウンセラー的役割
 - 3)学校と保護者との間の橋渡し
 - 4)学校関係者への情報提供
- 本研究では水野(2008)の挙げた4つの役割について調査を行った。

2. 調査概要

調査は滋賀県のX小学校にて実施した。この小学校の外国人児童等の割合は全校児童の約1割(約50名)を占める。ポルトガル語を母語とするものが多く、数名スペイン語を母語とする児童が在籍する。外国人児童の約半数は日本語指導が必要な児童となっている。また外国人保護者のうち92%は何らかの言語的支援を必要としていた。

母語支援員Aはポルトガル語を担当し、日本語指導員等も兼務する形で、基本的に週4日同小学校に勤務している¹⁾。本研究では2022年4月~12月まで9か月間に記録された日本語指導担当教員と母語支援員の連絡ノート・母語支援員Aの勤務記録、そして日本語教室での抽出指導と入り込み指導、通訳場面の参与観察を行い、言語的支援の内容を調査した。

3. 結果と考察

主に母語支援員Aが行った言語的支援の内容を分析すると、外国人児童等が多数在籍する小学校での母語支援員の主要な業務は「学校と保護者との間の橋渡し」に関する業務となっていた。月により差は見られるが、平均すると勤務時間の65%はこうした業務に充てられている。母語支援員が行った言語的支援の内容を水野(2008)の挙げた4つの役割別にまとめると次のようになる。

3.1 学習指導・カウンセラー的役割

学習指導は日本語教室での抽出指導と在籍学級への入り込み指導の形で行われた。日本語教室での抽出指導では、基本的に児童には日本語のみで対応し担当教員の補助的な役割を担った。児童がテストの設問を理解していない場合や担当教員の問いかけが伝わっていない場合には、通訳を行っていた。また先行学習として国語教材の内容を母語で解説することもあった。在籍学級の入り込み指導では、教科テストの設問を母語で説明したり、授業内容を隣に座って通訳している。こうした学習指導の際の通訳は、学習言語をそのまま訳すのではなく、児童がわかるように通訳するという特徴がみられた。日本語指導担当教員によれば、こうした母語支援は児童が教科内容を深く理解するための助けとなっているという。しかし学習指導の途中であっても緊急連絡や、保護者対応等で指導を中断しなくてはならないこともあり、継続的に指導に関われる状況にはない。

「カウンセラー的役割」については、児童の不安な気持ちを聞き取ったり、児童間トラブルがあった際、教師の聞き取りに同行し、日本語ではうまく説明が出来ない児童の言い分を母語で聞き、教員に伝えていた。また養護教員が児童に怪我の状態や体調を詳しく聞く必要がある際に呼ばれることも多かった。こうした「カウンセラー的役割」(児童の学校生活支援)に費やした時間は、記録上は多くない。しかし休み時間に、母語支援員と話すため、職員室にやってくる児童が多くみられ、母語支援員が校内にいることが児童の心の安定につながっている様子が見受けられる。

3.2 学校と保護者との間の橋渡し・学校関係者への情報提供

もっとも時間のかかる業務となっていたのは、学校配布文書や通知表の所見の翻訳である。必要最低限の文書に限っているにもかかわらず、調査を行った9カ月間で約340件の翻訳を行っていた。学校文書の翻訳は簡単な変更で済むものもあるが、所見の翻訳や新しい文書の翻訳には時間がかかる。

また通訳や保護者への連絡もひと月当たりの平均が40件近くになり、主要な業務となっていた。こうした通訳や連絡は電話で行われることが多い。校内トラブル等に関して学校から保護者へ電話で説明する際にも、母語支援員のみが話すのではなく、担任が日本語で説明した後で通訳するという一種の電話通訳の形をとっている。対面通訳は個別懇談や家庭訪問に加え、電話では誤解が生じる可能性がある場合や保護者からの要請があった場合に限られた。

通訳・連絡の主な内容は、多い順に①一般的な連絡や問い合わせ（欠席理由の確認・持ち物連絡等）②保護者から学校への相談（学習面・トラブル等）③生徒指導関係（校内トラブルに関する学校から保護者への説明等）④保健に関する内容⑤会計関係⑥特別支援教育に関する事項となり、通訳が幅広い場面で必要になっていることがわかる。

こうした通訳場面を観察すると、母語支援員は相互のコミュニケーションが円滑におこなわれるよう、文化的背景も考え、言葉を選びながら双方に通訳する様子が見られた。

「学校関係者への情報提供」については、私的な連絡手段を使って、保護者とやり取りすることはないためか、件数は少なかった。

4. 母語支援員に必要な能力と今後の課題

調査から小学校の母語支援員には「学校と保護者との間の橋渡し」に関する業務が強く求められていることがわかった。このことから、外国人児童が多数在籍する小学校において、母語支援員に求められる能力には次の4つが考えられる。

- 1) 学校配布文書を早く正確に翻訳でき、様々な場面で通訳できる語学力
- 2) 対象児童・保護者の文化的背景や日本の学校制度・学校文化に関する知識を持ち、説明できる力
- 3) 保護者からの相談を聞き取り、その解決のために教職員と協働できる能力
- 4) 児童がわかるレベルの語彙で通訳し、教職員と児童の間の橋渡しをする力

これは一事例を分析した結果であり、母語支援員の役割や求められる能力は勤務する学校の校種、受け持つ外国人児童・保護者の人数、勤務時間数等により異なると考える。今後は調査の対象を広げ、母語支援員が学校現場で担っている役割と求められる能力をより詳細に明らかにしていきたい。

注)

1) この他、週1日(3時間)の範囲でスペイン語の母語支援員も派遣され、10月からは懇談や翻訳の忙しくなる時期にポルトガル語の通訳1名が補助に入ることもあった。

【引用文献】

古川敦子(2019)「外国人児童生徒等の教育における母語支援員の役割—母語支援員・日本語指導担当教員・管理職へのインタビュー調査から—」

ポスター発表：子どもの日本語教育研究会第4回大会 2019年3月2日 武蔵野大学

水野真木子(2008)『コミュニティー通訳入門』大阪教育図書 pp.124-126